

1P15

熊本県における幼児の食習慣・食生活の実態調査 — 噛む習慣を中心とした解析 —

當房 浩一¹、守田 真里子²、川上 育代²、
大柿 恵子²、秋吉 澄子³、原田 香³、増淵 千保美⁴、
坂田 敦子²

¹信州大学学術研究院医学系（旧所属：尚綱大学生生活科学部栄養科学科）

²尚綱大学生生活科学部栄養科学科

³尚綱大学短期大学部食物栄養学科

⁴尚綱大学短期大学部幼児教育学科

【目的】

近年、歯科治療を要する児童の過半数が未受診とされ、いわゆる「口腔崩壊」が問題とされる。幼児期は、食習慣や咀嚼力を育む重要な時期であり、望ましい習慣を身に付ける支援方法の確立が喫緊の課題である。一方で、幼児の噛む習慣に関する実態調査は限られ、発達段階や地域性を考慮した支援は難しい。そこで本研究では、熊本県における幼児の食習慣・食生活調査を行った。

【方法】

2018年2月20日～3月10日に熊本県内の保育施設に通う1214世帯に調査を実施した。保護者が回答した調査票から得られた1030名のデータ（回収率66.2%：805世帯）のうち、基礎データの未回答および不正回答がある者を除外した1.5歳から6歳までの幼児548名を解析対象者とした。「噛む回数」、「噛む動作の支障の有無」等の尺度について、年齢ごとの比率を調べた。次に、幼児および保護者の特性・生活習慣等に関する159項目のクロス集計を行った。独立性の検定は、フィッシャーの直接法を用いた。「よく噛んで食べる」に有意な24項目と「噛む回数（カットオフ10回）」に有意な26項目のうち、相関の低い尺度を独立変数とし、ロジスティック回帰分析をした。共変量は、幼児の年齢、家族人数とした。統計解析は、IBM SPSS Statistics ver. 27.0を用いた。

【結果】

幼児の噛む回数は、「20回以上」10.9%、「15～10回程度」53.6%、「10～5回程度」33.5%、「ほぼ飲み込む」2.0%であった。噛む動作の支障の有無については、「支障がある」1.6%、「時々支障がある」3.3%、「問題はない」95.1%であった。幼児の「よく噛む」または「噛む回数」に対する負の関連因子は、幼児の低年齢、噛む動作の支障、多食、調理担当者の起床時間が早朝（6～7時）、噛む回数の少なさ、主食・主菜の偏食、豆類の低摂取頻度、特定の人以外のかかわりが苦手であった。

【考察】

噛む回数は、10～15回程度の比率が多く、噛む習慣の更なる意識付けが必要と考えられた。また、噛む動作の支障は約5%あり、個別対応が必要である。噛む習慣の負の要因に対しては、幼児の年齢や食傾向、調理担当者の食の関心に応じた対策を講じる必要がある。さらに、幼児の噛む習慣は、調理担当者の起床時間や人間関係の苦手意識と関連があり、保護者と幼児のかかわり方の重要性が示唆された。

1P16

幼児の野菜摂取と不定愁訴

黒谷 万美子¹、中出 美代²

¹愛知学泉大学

²東海学園大学

【1.背景及び目的】

近年、子どもの食生活の乱れが数多く指摘されその食生活の乱れが小児肥満などの子どもの生活習慣病に大きく関与している。本研究は幼児の野菜摂取や不定愁訴の状況について明らかにするとともにそれらの関連性について検討することを目的とした。

【2.研究方法】

（1）調査対象

愛知県内のA幼稚園に通う年少から年長の幼児とその保護者を対象に自記式アンケートを留置き法により実施し、ほとんど記入されていない者を除く219組の親子について調査分析を行った。

（2）調査期間

2019年2月に実施した。

（3）調査内容

調査内容は主として次の項目からなっている。

①属性（年齢、性別、身長、体重）

②朝食習慣（食事頻度、規則性、主食・主菜・副菜を揃えた食事の頻度、共食の頻度）

③野菜の摂取について

（4）倫理的配慮

調査実施に当たっては、東海学園大学倫理委員会にて倫理的に問題を有しないとの判断後、対象者には研究の主旨、プライバシーの保護について書面で説明し自由意志による協力を求めた。協力の拒否の機会を保障した上で、情報管理に十分配慮し研究を行った。

（5）分析方法

統計解析には、SPSS19.0 for Windowsを用い、検定は χ^2 検定およびMann-Whitney-Utest, kruskal-wallis - ANOVAtestを行い、有意水準は5%（両側検定）とした。

【3.結果と考察】

（1）属性

子どもの性別では女性108人（49.3%）、男性111人（50.7%）であった。年齢別に見た結果、6歳が最も多く98人（44.7%）、次に5歳91人（41.6%）、4歳16人（7.3%）、3歳と7歳が7人（3.2%）ずつであった。

（2）野菜摂取

野菜摂取では自分から食べるが51.4%を占めたものの嫌いな野菜がある児が78.0%、朝食において野菜を食べない児が53.9%と半数以上を占めていた。

（3）不定愁訴

不定愁訴16項目の中である（「よくある」「時々ある」が多い項目は「いらいらする（機嫌が悪い）」が32.7%、次に「落ち着きがない」が24.3%であった。

（4）野菜摂取と不定愁訴

野菜摂取において「自分から食べる」か否かと不定愁訴について見た結果、「食欲がない」（ $p<0.05$ ）と「疲れやすい」（ $p<0.01$ ）において差が認められた。食習慣と不定愁訴との関連が明らかになり、野菜摂取が重要である事が示唆された。